筑波学院大学紀要第16集　147 ～ 159 ページ　　2021年

＜研究ノート＞

地域連携を重視した教育実践報告
―県立高校における体験的地域学「つくばね学」を通して―

茂呂　輝夫*・金久保紀子**

Report on educational practices that emphasize community collaboration
― Experiential Regional Studies 'Tsukubane-gaku' in Prefectural High School ―

Teruo MORO * and Noriko KANAKUBO **

抄　録

筑波山麓周辺の公共施設や福祉施設、郷土の文化施設、義務教育学校などでの地域の人たちとの連携した様々な体験活動として、異世代の人とふれあう体験的地域学「つくばね学」を2016年に立ち上げた。現在、その活動を通して、人や社会とのつながりの大切さを理解するために、受け入れ団体と調整をしながら事業運営を進めている。その事業概要について整理し、生徒アンケートなどから検討を加えたところ、この体験活動から社会人として必要な資質を習得できる可能性が示唆された。

キーワード：地域連携、体験活動、異世代交流、体験的地域学、つくばね学、社会人

Abstract

Five years ago, we launched "Tsukubane-gaku", an experiential regional study program that allows students to interact with people of different generations at public facilities, welfare facilities, local cultural facilities and compulsory education schools around the foot of Mt. Tsukuba. Through these activities, the program is currently being managed in coordination with host organizations to help students understand the importance of connections with people and society. After organizing the outline of the project and examining it based on a questionnaire of the students, it was suggested that this experiential activity has the potential to help students acquire the necessary qualities for working adults.

*　茨城県立筑波高等学校、Ibaraki Prefectural Tsukuba Senior High School
**　筑波学院大学経営情報学部、Tsukuba Gakuin University

1．はじめに

初等・中等教育の学校と地域連携の取組の必要性については、中央教育審議会答申などで提示されてきたが、茨城県の県立高校は主管が茨城県教育委員会のため、市町村教育委員会や地域の団体との連携については、地域行事などに協力している程度が現状として多く見受けられる。

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（中央教育審議会、2016）の中で、幅広い地域住民等の参画により地域全体で未来を担う子供たちの成長を支えること、また地域を創生する地域学校協働活動等の推進により、どのような資質・能力を育むのか地域と学校が認識を共有することが求められている。さらに、高等学校学習指導要領（2018年告示、文部科学省）の総則では、生徒の特性や進路、学校や地域の実態等を考慮し、地域や産業界等との連携を図り、産業現場等における長時間の実習を取り入れるなどの就業体験活動の機会を設け、地域や産業界等の人々の協力を積極的に得る必要性が提示されている。

そのような中で、茨城県立筑波高等学校では学校活性化を目指し、地域の人たちとの連携を体験的地域学「つくばね学」と位置づけ、2016年度より５年間実践をしてきた。茨城県で初めて実施された事業は、現在も受入れ団体と調整をしながら運営を進めている。

この「つくばね学」は、ユネスコスクールとしてESD「持続可能な開発のための教育」を取り入れている岡山県立矢掛高等学校の「やかげ学」を参考にして創設された。学校設定科目[注1)]の「やかげ学」は、町内13の施設で１年間の実習を行い、実際の地域の様々な仕事の手伝いをしていく中で将来を考えていく機会にし、生徒が受入れ先で感謝されることにより自己肯定感の向上をねらった事業である。この「やかげ学」は現在も事業運営がなされている。

筑波高校では、地域社会との連携を深めることを模索し、2013年、2014年と「やかげ学」を実際に視察し、特色ある学校運営について説明を受けるなどして、準備を進め、2016年度から「つくばね学」を立ち上げた。

本稿では、筑波高校における2018年での２年次から、翌年2019年の３年次までの２年間の「つくばね学」実習内容を報告する。併せて、過去の生徒アンケート、自由記述などから生徒の成長にどのような効果があるかを検証し、「つくばね学」について今後の方向性を考察する。

2．筑波高校の沿革

筑波高校は、1950年４月10日に茨城県立土浦第二高等学校北条分校として開校した。その後、1961年４月１日に茨城県立筑波高等学校（全日制普通科）となり、現在の校名となった。校舎は、筑波山のふもとにあり、自然豊かな地域の中に学校がある。周辺には田畑が広がっており、毎年、全校生徒による筑波山登山は恒例行事となっている。つくば駅からは、車で25分程度であり、約７割の生徒がつくば市内の中学校から進学している。

2012年５月６日には、つくば市北条地区竜巻により被災し、体育館の窓ガラスが割れるなどの被害を受けたが、復旧工事後に学校は再開した。その時に、学校近隣の被災家屋の片づけを生徒が自主的にボランティアとして手伝った。この災害を契機として、生徒と地域との関わりが始まっている。

2016年４月より、「つくばね学」が開始され、本年で５年目を迎える。2019年４月には、コース選択制が導入され、アカデミックコースと地域ビジネスコースが新設された。翌年、2020年４月10日に創立70周年を迎えた。現在は、アカデミックコース（文系・理

系）と地域ビジネスコース（情報系･家庭系）の４コースから選択することができる。

３．体験的地域学「つくばね学」について

筑波高校２～３年生で取り組む「つくばね学」では、毎週金曜日の午後の授業において、学校周辺の各施設で１年間の実習を行い、社会人として必要な資質である社会性やコミュニケーション能力の向上を目指している。また、地域に対する理解を深める地域密着型の体験的学習を通して、「地域に支えられ、地域を支える高校生」を育成することもねらいとしている。教育課程においては、体験的地域学「つくばね学」の２年次を「つくばね学」、３年次を「つくばね学探究」という授業科目名にして、この教育事業を進めている。

表１　つくばね学　年間予定表（2019 年度）

日程			２年生（2018年度入学生）		３年生（2017年度入学生）	
月	日	曜	内容	場所	内容	場所
4	12	金	つくばね学オリエンテーション	視聴覚室	実習（つくばね学探求①）	各施設
4	19	金	座学①（マナー講座）	視聴覚室	実習（つくばね学探求②）	各施設
5	10	金	座学②（つくば市の概要）	視聴覚室	実習（つくばね学探求③）	各施設
5	10	金	座学③（つくば市の観光物産）	社会科室		
5	24	金	座学④（つくば市の歴史）	視聴覚室	実習（つくばね学探求④）	各施設
5	24	金	座学⑤（つくば市の文化財）	社会科室		
5	31	金	座学⑥（つくば市の福祉）	体育館	実習（つくばね学探求⑤）	各施設
6	14	金	座学⑦（福祉体験学習）	体育館	実習（つくばね学探求⑥）	各施設
6	21	金	座学⑧つくばね学と進路	視聴覚室	実習（つくばね学探求⑦）	各施設
7	5	金	座学⑨（各実習施設の説明）	体育館	実習（つくばね学探求⑧）	各施設
7	12	金	座学⑩自己紹介カード	各教室	野球応援	野球場
7	26	金	実習先との懇談会	会議室	実習先との懇談会	会議室
			３年から２年への引き継ぎ	会議室	３年から２年への引き継ぎ	会議室
8	23	金	施設打ち合わせ	会議室		
9	6	金	実習に向けての事前準備	体育館	演習（つくばね学と進路）	各教室
9	13	金	実習①	各施設	演習（実習のふり返り①）	視聴覚室
9	20	金	実習②	各施設	演習（実習のふり返り②）	視聴覚室
9	27	金	実習③	各施設	演習（実習のふり返り③）	視聴覚室
10	11	金	実習④	各施設	演習（発表準備①）	各教室
10	18	金	実習⑤	各施設	演習（発表準備②）	各教室
10	25	金	インターンシップ	各施設	演習（発表準備③）	各教室
11	1	金	実習⑥	各施設	演習（発表準備④）	各教室
11	8	金	実習⑦	各施設	演習（発表準備⑤）	各教室
11	15	金	実習⑧	各施設	演習（発表準備⑥）	各教室
11	22	金	実習⑨	各施設	演習（発表準備⑦）	各教室
11	29	金	実習⑩	各施設	演習（発表準備⑧）	各教室
12	6	金	修学旅行結団式	体育館	演習（発表準備⑨）	各教室
12	13	金	修学旅行　後処理　礼状等	各教室	つくばね学発表会予行	各教室
12	14	土	つくばね学発表会	筑波庁舎	つくばね学発表会	筑波庁舎

1	24	金	実習⑪	各施設	演習（発表会を終えて⑩）	各教室
1	31	金	実習⑫	各施設	学年末考査	各教室
2	7	金	実習⑬	各施設	＊３年生は２月より自由登校	
2	21	金	座学（中間報告会準備）	各教室		
2	27	木	つくばね学中間報告会	体育館		

３年生から２年生への引き継ぎは、施設ごとに行われ、実習内容、留意点、持参品などについて詳しい内容が伝えられる。

３．１．事業概要

【つくばね学】２年次：総合的な学習の時間２単位で全員受講

２年生の４月から７月までは、座学として「つくば市のまちづくり」「つくば市の文化」「つくば市の歴史について」「社会人としてのマナー」等の授業を校外から講師を招いて行い、郷土つくば市についての理解と実習マナーを身に付ける。７～８月で実習先を決定し、９月からそれぞれの施設で実習を行う。各施設の受入れ担当者は観点別に３段階で生徒の評価を行い、実習期間中は教員が担当施設を訪問し、受入れ担当者と生徒の活動状況について情報交換をする。

【つくばね学探求】３年次：B 類型[注2)] の生徒のみ学校設定科目として２単位受講

４月から７月まで原則２年生と同じ活動場所での実習を行う。８月に２年生に活動を引き継ぎ、実習を終了する。９月以降は校内で活動のまとめ、ふりかえりを行い、12月に地域に向けて活動の発表をする。評価は、まとめの作業および発表について行う。

３．２．年間計画

2019年度も例年通り、２年生の前半は学校で座学、後半は各施設での実習を行った。３年生の前半は各施設での実習、後半の２学期は学校での発表準備、12月の中旬につくばね学発表会を実施した。

３．３．実習施設

実習先は、表２の示す通りである。計80名が16の施設で、２年次の後半（2018年９月）から３年次の前半（2019年７月）にかけて実習を行った。

表２　2018～2019年度　つくばね学実習先一覧

No	分野	実習先	受入数
1	教育	つくば市立義務教育学校（小学校）	24
2	教育	つくば市立幼稚園	2
3	教育	つくば市立保育所	2
4	福祉	特養老人ホーム	5
5	福祉	つくば総合福祉センター[注3)]	5
6	農業	農業生産法人（稲作・野菜）	8
7	農業	個人農家（稲作・野菜）	5
8	農業	個人農家（稲作・野菜）	2
9	農業	個人農家（稲作・野菜）	2
10	製造	地元製麺所	2
11	製造	地元製麺所	2
12	医療	地元薬局	1
13	総合	矢中の杜[注4)]	5
14	総合	華の幹（はなのき）[注5)]	8
15	総合	筑波交流センター[注6)]	2
16	伝統	筑波山ガマ口上保存会[注7)]	5
			計80（人）

３．４．実習の様子

生徒は毎週実習先で様々な活動を行ってきた。実習内容は事前に担当教員と受入れ担当とで協議し、受入れ先に無理がないように決定しているが、生徒の特性を見て受入れ先がその都度、判断することもあった。

具体的な活動の例を挙げる。受入れ先の業務に沿って体を動かす実習も行っている。田

植えを前に米の苗床の作業（写真１）をしたり、古い家屋のほこりやごみを撤去しながら清掃作業（写真２）などである。また、写真３、４のように、生徒から見て年少者の学習や生活のサポートをするような活動もあった。状況によっては、生徒は見学だけということもある。写真５のように製麺所では、出来上がった麺を包装して商品として販売する作業に従事した。また、地元の口伝芸能であるガマ口上を経験者から学び、体得する（写真６）といった活動もある。単に作業を手伝うのではなく、受入れ先の事業内容を理解し、全体の中でのその作業の位置づけ、および自分の役割を認識して生徒が主体的に動くことができるような説明を受入れ先にはお願いしている。

写真１　米の苗床つくり

写真２　窓枠を外した清掃作業

写真３　小学校での学習支援

写真４　幼稚園の帰りの会

写真５　製麺所での作業

写真６　ガマ口上の実技練習

4．生徒のアンケート結果および考察

「つくばね学」に関して、生徒アンケートを2019年12月（「つくばね学発表会」終了後）に実施した。「つくばね学」の受講が終了した３年生全員を対象とした。設問１は「つくばね学」を体験する前の気持ちについて、設問２は「つくばね学」を終えてみての気持ちについて、それぞれ３択で回答を求めた。設問３は、どんなことを学びましたか（３つまで選択）という問いで、設問４は自由記述として感想を書く調査を行った。毎年、ほぼ同時期に同じ質問項目による調査を行い、今年で３回目のアンケート調査となった。

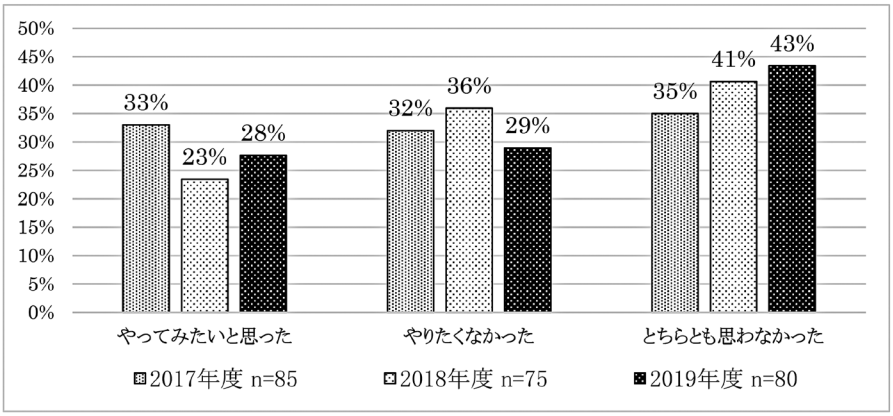

図１　設問１「つくばね学」を体験する前の気持ちについて

設問１の「つくばね学」を体験する前の気持ちについては、2017年度と2019年度は「やってみたいと思った」「やりたくなかった」がほぼ同じぐらいの回答数であった。2018年度は、「やりたくなかった」は「やってみたいと思った」よりも高い数字であった。

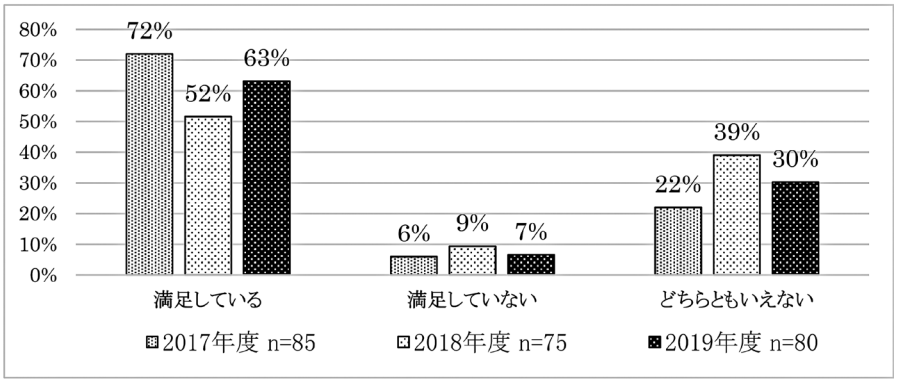

図２　設問２「つくばね学」を終えてみての気持ちについて

一方、設問２　「つくばね学」を終えてみての気持ちについてでは、３年間ともに「満足している」の回答数が最も高くなっている。「満足していない」は、「満足している」「どちらともいえない」と比べて３年間ともにかなり低い数値となっている。

2018年度については、3か年の中で「満足している」が最も低く、「どちらともいえない」が最も高い数値となっている。

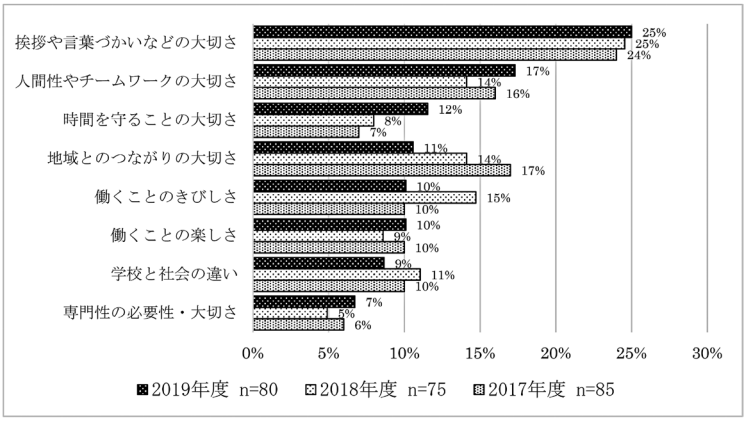

図3　設問3「つくばね学」でどのようなことを学んだかについて

設問3では、3年間を通して「挨拶や言葉づかいのなどの大切さ」が一番高い。2019年度は、「人間性やチームワークの大切さ」が2番目に高い結果となっている。

表3　自由記述（生徒）の分類

分類1【不安感の払拭】
・初めは小学生と会うのが嫌で子どもと接することができず不安でした。何回か実習に行くうちに、子どもたちに会うのが楽しくなり、次第に行きたくなりました。 ・最初はやりたくなかったが、毎週金曜日に実習に行くたびに、小学生がフレンドリーに接してくれ、次第に行くのが楽しみになった。小学生はかわいかった。勉強を教えるのは大変だったが、とても良い体験になった。 ・最初は嫌だったが、慣れていくうちに楽しくなった。
分類2【コミュニケーション能力の向上】
・人と関わることでコミュニケーション能力を磨き、楽しみながら仕事をすることができました。 ・コミュニケーション能力が身についた。人との関わり方を学ぶことができた。 ・実習を通じてコミュニケーション能力が身についた。
分類3【社会人としてのマナーやモラルの向上】
・つくばね学をとおして、礼儀と時間を守ることの大切さを学んだ。とてもためになった。 ・実習をとおして、社会的な行動力が向上し、とても良かった。 ・社会人としてのマナーなどが身についたと思います。 ・何事にも責任を持つことの大切さを自分自身で知ることができた。
分類4【地域への関心・地域活動への参加】
・周囲の人たちがとても優しくて、とても楽しかった。これからは、自分が地域のゴミ拾いなどを進んでしたい。 ・地元に触れる良い機会となった。 ・「矢中の杜」での実習をもとに、進学する動機、大学の課題について考えることができ、とても良い経験となった。
分類5【つくばね学に対する満足感・充実感】
・今まで経験できなかったことができたので良かったと思う。仕事の大変さが理解できたと思う。 ・つくばね学を通して、今まで体験できなかった貴重な時間を過ごすことができた。 ・これまで学べなかった事について学べたので良かったと思う。 ・小学生がかわいかった。小学生に教えながら、自分たちもたくさんのことを学ぶことができた。 ・たくさんの子どもたちとふれあえて楽しかった。 ・3年間、つくばね学をやってよかった。 ・様々なことを経験し、色々なことがあって、とても楽しかった。

次に、活動の振り返りアンケートでの自由記述（生徒）をとりまとめて、表３のように５つに分類し、その分類ごとの内容として表題をつけた。まず、分類１は「不安感の払拭」、分類２は「コミュニケーション能力の向上」、分類３は「社会人としてのマナーやモラルの向上」、分類４は「地域への関心・地域活動への参加」、分類５は「つくばね学に対する満足感・充実感」とした。

設問１の「つくばね学」を体験する前の気持ちについては、例年「やってみたいと思った」「やりたくなかった」がほぼ同じぐらいの回答数である。年度別に見ると、2017年度と2019年度は「やってみたいと思った」「やりたくなかった」が同数にかなり近い。2018年度は、「やってみたいと思った」よりも「やりたくなかった」と回答する生徒の方が多かった。「どちらとも思わなかった」が例年４割程度であること、「やってみたい」という生徒は全体の３分の１弱程度であることが分かった。このことから、「つくばね学」のスタート時には、生徒全員に高いモチベーションがあったわけではないと言えるだろう。

しかしながら、設問２　「つくばね学」を終えてみての気持ちについてでは、「満足している」の回答数が他の２つよりもかなり高い。「満足していない」は、「満足している」「どちらともいえない」と比べて低い数値となっている。このことは、「つくばね学」開始時には、その活動に対して不安や嫌悪感を抱いていた者が多数いたことが予想でき、そのような生徒たちも１年間の実習を通して、不安感が払拭され、満足感や充実感を感じるようになっていったと考えられる。生徒の自由記述からも、それを裏付ける記載が見られている。

設問３「つくばね学」でどのようなことを学んだかについては、３年間ともに「挨拶や言葉づかいなどの大切さ」を一番に挙げている。この挨拶と言葉づかいは、社会人の基本であり、身につけるべき必須のマナーである。学校内でも重要性を指導しているが、実際に地域の実習先へ行くことで、その大切さを実感できたということは生徒にとって大きな収穫である。2019年度は、「人間性やチームワークの大切さ」が２番目に高い結果となっており、コミュニケーション能力の重要性も理解できたと推察できる。

自由記述においては、「最初は嫌だったが、慣れていくうちに楽しくなった」などの回答があり、少しずつ実習に慣れていった様子がうかがえる。さらに、「実習を通じてコミュニケーション能力が身についた」「社会人としてのマナーなどが身についた」などの回答から、コミュニケーション能力、マナーやモラルの向上を生徒が意識できていることが分かった。

また、「自分が地域のゴミ拾いなどを進んでしたい」「進学する動機、大学の課題について考えることができ、とても良い経験となった」などの回答から、今後の前向きな姿勢が育まれた可能性も考えられ、実習が次のステップにつながったと思われる。

「今まで体験できなかった貴重な時間を過ごすことができた」などの回答から、この「つくばね学」の実習を通し、充実した活動ができて満足した様子がうかがえた。それゆえ、設問２　「つくばね学」を終えてみての気持ちについては、３年間ともに「満足している」の回答数が最も高くなっている要因と推察できる。しかし、実習中に嫌なことがあった生徒や前向きでない生徒は自由記述式アンケートには記入していないことも予想される。今後は、「満足していない」という少数の意見にも目を向けて、より良い改善の方策を模索していく必要がある。

一方、「つくばね学発表会」を見学された各施設の方などの自由記述式アンケート[注8)]では、「各グループの発表では、初めて学ん

だ体験の内容、身についたこと、改善（反省）点がとても分かりやすかった」「後輩に伝えるメッセージが温かく、これまで積み重ねた歴史を感じた」などのような意見があった。このことから、「つくばね学」を通して新たなことを体験し、反省や改善を加え、それを下級生へ伝承していったと考えられる。また、生徒の発表から「生徒が社会性、コミュニケーション能力の大切さを実感したことが伝わってきた」「多くの学びを堂々と自分の言葉で発表していた」「感謝の気持ちが各グループの発表に表れていた」などのコメントもあり、生徒の実習に対する成果が示唆された。さらに、「１年間関わらせていただいた子たちなので、ステージに立ち発表する姿を見るだけで感無量です」「休憩時間がポスターセッションとなっていて、地域の方と生徒、先生方が触れ合う様子が素晴らしいです。このプロジェクトがあってこその縁だと思います」などの意見もあり、「つくばね学」を通して確実に生徒が地域の方々とつながっていった様子もうかがわれた。

この事業をクラスマッチ（球技会）や文化祭などの学校行事と対比し、社会人として必要な資質習得の観点から検討を加えてみる。学校行事では、生徒の役割分担・準備を通して、責任を持つことの重要性、また達成感を得ることが期待される。また、前年度の様子を知っているという安心感も持ちやすい。一方、つくばね学では各施設で生徒が１年間の実習を行うことにより、様々な新たなことを学び、反省点を生かして改善し、地域の方々との交流が深まっていった様子が見られた。生徒及び各施設の方などの自由記述式アンケートから、この実習を通して社会性、コミュニケーション能力の伸長がうかがわれたことから、社会人として必要な資質を習得した可能性もあり得ると言えるであろう。このことが前述の学校行事と比較して、「つくばね学」の大きな特徴と考えられる。

次に、「つくばね学」のアンケート以外の部分について考察を加える。

まず、指導上の工夫として生徒間の引き継ぎが挙げられる。例年、フリートーキングの形で進められており、その生徒の様子を観察すると、２年生は実習に対する不安から、どのような活動をするのか３年生に質問するケースが多い。３年生は、具体的な活動例を説明し、有意義な活動であることを伝え、後輩を励ます形で行われている。この引き継ぎが２年生のよいスタートとなり、先輩後輩の信頼関係が深まる恒例行事となっている。このことが「つくばね学」の伝統を継承する方法のひとつになっているとも考えられる。併せて、教員も引率時の注意事項、評価などについて教員同士で個別に引き継ぎを行っている。

教員は、基本的に生徒の引率であり、あいさつと評価表を担当の指導者に渡す仕事を行っている。本来なら、若手教員研修の一環として新採教員などが生徒とともに実習することも施設によっては可能である。しかしながら、教員による研修ができない理由として、教員が複数の施設担当を掛け持ちしていること、ここ数年のクラス減による教員減のため、「つくばね学」に対して十分な対応ができなくなってしまうことが挙げられる。今後は、本校への人的支援の方策も検討されるべきであろう。

幼稚園や保育所などで実習している生徒は、将来の職業と重ね合わせているケースも見られている。そこで、高校卒業後、あるいは高等教育機関進学後の就職先を確認し、この「つくばね学」がどのように進路実現に関わっているのか調査することが必要であろう。そこから「つくばね学」の有効性を導き出し、広く企業や就職先とのマッチングを検討していくことも今後は期待できる。

全体的に見て、この「つくばね学」は地域と連携し、適切な運営がなされていることが

確認できた。しかしながら、この事業のより一層の発展のためには、今後は地域の課題を見つけるために生徒同士でディスカッションをしたり、それを改善するためにはどのような取組が必要となるのか検討したりすることも必要であろう。地域の発展に高校生はどのように関わることができるのか、生徒全体で話し合うことも有効であると考えられる。

地域連携の例として、筑波学院大学ではオフ・キャンパス・プログラム（OCP）を2005年より開始している。この取組は、「つくば市をキャンパスにする」という構想で、学生がひとりの市民として様々な社会活動に参加し、幅広い人間関係を築くことができる実践プログラムである。これまでにも、東日本大震災では宮城県気仙沼市や福島県いわき市での支援活動をつくば市やNPO団体、他大学と協力して行ってきた。つくば市北条地区竜巻の災害の時も、つくば市災害ボランティアセンターと連携し、学生のボランティア派遣を行った。筑波高校の生徒も卒業後に、「つくばね学」の経験をもとにしてボランティアとして地域での関わりを深めたり、大学進学後にOCPのような活動に取り組んだり、将来的には地域のリーダー的存在として成長していくことが期待されるであろう。

さらに地域の方を本校の応援団として連携を深めるために、「アドバイザー会議」[注9)]の実施も有効であろう。前述の筑波学院大学でも、同様の会議を実施している（武田・金久保（2015））。この会議は、「つくばね学発表会」を参観した後に行い、今後の運営方針などに関して自由に意見を述べてもらう意見交換会である。実習担当者、学校職員、保護者や地域の人たちが集まり、「つくばね学」の問題点や改善点、実習前後の学校での指導、今後の運営方針などについて議論する。このような取組を新たに行うことで、「つくばね学」のさらなる発展と学校運営協議会の発足のきっかけが期待できる。

5．今後の展望

アンケート及び自由記述の結果から、この「つくばね学」の活動を通して社会人として必要な資質を習得できる可能性が示唆された。今後もこの事業を継続することによって、さらなる学校活性化と生徒の資質向上を目指していく方針である。そこで、今後の学校運営にあたって、2つの視点から検討をする。

まず、文部科学省は2020年7月17日に中央教育審議会の特別部会を開催し、高校の普通科を3つに再編する案を明らかにした。その内容は、文系･理系などの枠組みを超えた「学際融合学科（仮称）」と地域社会の課題解決を目指す「地域探求学科（同）」、この2学科以外にも文化やスポーツ人材育成などの特色ある教育も学科として認める方針を示した。「地域探求学科」は、地元自治体や企業等とコンソーシアムを構築し、地域課題をテーマとした探求的な学びを追求する学科である。この新学科は筑波高校「つくばね学」の教育実践と同じ方向性であり、地域社会に潜んでいる課題を発見し、その問題を解決しようとする高校生の姿は社会的に有為な活動への取組と考えられる。文部科学省は早ければ2022年度春からの新設を想定している。筑波高校のさらなる発展は、この新学科とともに進めていくことが地域の人たちからも期待されるであろう。

そのためには、筑波高校と地域社会がより歩み寄って、体験的地域学「つくばね学」を充実させる必要が出てくる。

「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答申）」（中央教育審議会、2015）では、これからの地域と学校の目指すべき連携・協働の方向性として「地域とともにある学校」「子供も大人も学び合い育ち合う教育体制の構築」「学校を核とした地

域づくりの推進」の３つが示された。その中でも、「地域学校協働活動」の推進、「地域学校協働本部」の整備、「コミュニティ・スクール」の推進が提言された。

そこで、学びと活動の橋渡しをする上で、「個人の能力と可能性を開花させ、全員参加による課題解決社会を実現するための教育の多様化と質保証の在り方について（答申）」（中央教育審議会、2016）では、社会教育主事や地域のコーディネーター等が学習者と様々な人々や地域活動、学習機会へつなげることが期待され、その人材育成が求められている。さらに、地域学校協働活動に参加した者や支援を受けた者がその学習活動を通して学習成果を蓄積し、将来の地域を支え、地域の課題を解決する人材に育っていくことが期待されている。

「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について（答申）」（中央教育審議会、2018）では、「地域とともにある学校」づくりのため地域と連携した教育活動の充実を一層推進している。その理由として、2017年の地方教育行政の組織及び運営に関する法律の改正により、教育委員会に学校運営協議会（コミュニティ・スクール）の設置が努力義務化されたことを挙げている。また、併せて2017年には、社会教育法も改正され、地域学校協働活動を実施する教育委員会が地域住民等と学校との連携協力体制を整備すること、学校との情報共有や助言を行う「地域学校協働活動推進員」の規定整備が示された。文部科学省からは、2017年４月に「地域学校協働活動の推進に向けたガイドライン」、同年９月には「地域学校協働活動推進員の委嘱のための参考手引き」の２つが提示され、地域学校協働活動の推進が求められている。2018年には、「地域学校協働のためのボランティア活動等の推進体制に関する調査研究報告書」が国立教育政策研究所社会教育実践研究センターより報告され、各地域のコミュニティ・スクールなどの取り組みが示された。それらの事例の中で、今まで１人で力を発揮していた方がコミュニティ・スクールとの関連を図ることにより、コーディネーターとして組織的な力の発揮が可能になったケースも報告されている。

このような時代の流れの中で、筑波高校は地域の人たちとのより一層の連携を目指し、地域の課題解決をともに行いながら、「つくばね学」を進めていく必要がある。まず、短期的には、つくばね学の教育的効果の分析、教育事業として受入れ団体からの詳細なフィードバックを得ること、さらには、教育事業としての改善を目指し、関連する教員同士のディスカッションや研修といったことを実施していかなければならない。

長期的なビジョンとしては、筑波高校が近い将来に「地域探求学科」を設置し、学校運営協議会（コミュニティ・スクール）の導入を検討することも必要であろう。地域の課題解決を生徒が地域の人たちと協働して進め、お互いに成長していく姿は学校の将来像としてふさわしいと考えられる。

【参考文献】

国立教育政策研究所社会教育実践研究センター（2018年３月）「地域学校協働のためのボランティア活動等の推進体制に関する調査研究報告書」

武田直樹（2013）「筑波学院大学オフ・キャンパス・プログラムが災害支援に果たした成果と課題―東日本大震災とつくば市北部竜巻災害を事例として―」『筑波学院大学紀要』第８集、pp.123-133

武田直樹・金久保紀子（2015）「筑波学院大学オフ・キャンパス・プログラム　10年間のチャレンジ」『筑波学院大学紀要』第10集、pp.191-207

中央教育審議会（2015.12.21）「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答

申）」
中央教育審議会（2016.5.30）「個人の能力と可能性を開花させ、全員参加による課題解決社会を実現するための教育の多様化と質保証の在り方について（答申）」
中央教育審議会（2016.12.21）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」
中央教育審議会（2018.12.21）「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について（答申）」
文部科学省（2017年４月）「地域学校協働活動の推進に向けたガイドライン」
文部科学省（2017年９月）「地域学校協働活動推進員の委嘱のための参考手引き」
文部科学省（2018年３月告示）「高等学校学習指導要領」総則

【参考 web】

ベネッセ VIEW21、2011-12月号「指導変革の軌跡」pp.24-27（岡山県立矢掛高等学校）https://berd.benesse.jp/up_images/magazine/2011_121.pdf　最終参照日2020年９月３日
Career Guidance 2016-10月号、Vol.414「地域課題解決型キャリア教育」pp.50-51 http://souken.shingakunet.com/career_g/2016/10/2016_cg414_25.pdf 最終参照日2020年９月16日
パナソニック教育財団助成事業「ICT を活用した地域間連携の在り方に関する実践的研究～中山間地域の持続発展を担う地域学（やかげ学）を通して～」http://www.pef.or.jp/wp-content/themes/panasonic_theme/db/pdf/042/2016_56.pdf 最終参照日2020年９月17日
岡山県立矢掛高等学校ホームページ　http://www.yakage.okayama-c.ed.jp/index.html 最終参照日2020年９月17日
読売新聞オンライン　2020年７月17日掲載 https://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/kyoiku/news/20200715-OYT1T50141/ 最終参照日2020年９月17日
日本経済新聞　日経電子版　2020年７月17日掲載 https://www.nikkei.com/article/DGXMZO61661450X10C20A7CR8000/ 最終参照日2020年９月17日

【注】

1）学校設定科目（学校設定教科）は、日本の学校において、学習指導要領で定められている教科以外に教育上の必要から学校独自で設定できる教科である。
2）B 類型とは、進路希望が就職の地域ビジネスコースを指している。一方、A 類型とは、進学希望のアカデミックコースである。
3）つくば総合福祉センターは、障害者支援施設で、同じ建物には特別養護老人ホームがあり、県内では珍しい障害者と高齢者の施設を併設する施設である。
4）筑波山麓の南、つくば市北条地区に建つ旧矢中邸（現在の矢中の杜）は、建材研究者である矢中龍次郎氏によって、1938年から1953年まで15年をかけて建設された昭和の邸宅である。約770坪の広大な敷地内に本館（居住棟）、別館（迎賓棟）の建造物が現存し、その周囲には庭園が広がっており、国登録有形文化財に登録されている。
5）華の幹（旧青木邸）は、つくば市にある築100年を超える古民家である。1907年に建てられた母屋はかなり荒廃が進んだ状態だったが、NPO 法人華の幹の古民家再生活動によって修復され、現在は教室や展示などイベントの際の貸し出しなど地域の憩いの場となっている。
6）地域交流センターは、さまざまな学級、講座等を行う生涯学習の施設である。つくば市内には、17の地域交流センターがあり、筑波交流センターでは図書の貸し出しを行っている。
7）筑波山ガマ口上保存会は、つくば市認定地域無形民俗文化財「筑波山ガマの油売り口上」

を保存継承しているボランティア団体である。

8）令和元年度「つくばね学発表会」（2019.12.14実施）の受付時に来賓（実習担当者、教育委員会職員など）へプログラムともに自由記述式のアンケートを配布した。そのアンケートを発表会終了後に回収した。

9）アドバイザー会議では、参加者はこれまでの経験で得た専門的な知識をもとに、主催事業に関して助言や忠告、今後の運営方針などについて意見交換をする。